



今

日、以前に録音したブラジルのカヤボ・インディアン¹の歌声をテープで聞いてみた。彼らの歌は何の飾り気もなく、それだけに力に溢れ、そして幾分不気味でさえあった。それは音の持つ力と神秘を改めて僕に思い知らせてくれる歌だった。民族音楽家がこの歌を聞けば、多分、その背景にあるインディアンたちの生活を分析し、説明してくれるだろうが、しかし、その歌にはどんな分類付けも拒否してしまうような「音」が存在していた。僕たちを魅惑し、困惑させ続ける、言葉では説明できない音の肌触りが。

僕を十五年の間「音の収集」という仕事に駆り立ててきたのも、きっとこの音の持つ不思議な肌触りに違いない。冷蔵庫のモーターの回る音から、科学者が作り出した風の音を利用するハーブまで、自分の興味を引いた音を何から何まで録音して集めたのは、七〇年代のことだった。それ以来、ブラジルやメキシコ、ネパール、日本、そしてアメリカ国内をさまざま旅しながら音を集め、それをレコードやラジオ番組に編集してきた。いま担当しているアメリカのラジオ番組「パルス・オブ・ザ・プラネット」では、世界各地の音の収集家と連絡を取りながら、送られてくる音をスタジオにもって聞く時間が多い。そこで僕が思い知らされるのは、音がどれほどの躍動を、詩を、そして瞬間のもつ息吹を僕たちにつたえてくれるか、ということだ。

ニュージャージー州の国立グレート・スワンプ自然保護区で一日をかけて録音を行っていたときのことだ。もうとっぷりと日が暮れ、蚊が皮膚を刺し始める。これ以上待っても音の世界には何もおこりそうもない。機材

をしまおうとしていたちょうどその時、すぐ近くの沼にそれまでじっと浮かんでいた一羽の鷺鳥が突然動きだし、鳴き声を立て始めた。一分ほどして、遠くの方から鷺鳥の群れの同じような鳴き声がかすかに聞こえてきた。鳴き声は少しずつ大きくなる。どうやら、僕の見ているその鷺鳥が灯台のような役目を果たし、鳴き声で仲間を導いているらしいのだ。やがて群れは沼にたどり着き、すさまじい水しぶきと鳴き声をあげながら水面に降りた。と同時に、隣接するニューアーク空港に着陸する飛行機の轟音が鳴り響いたのだ。いつもなら、飛行機に「汚された」音はすぐさま録音をやめてしまうのだが、考えてみればこのグレート・スワンプじたいが、飛行場予定地だったところを自然保護区として辛うじて残すことになった場所なのだ。そう思うと、この飛行機の轟音こそ、市街地が広がる中にとぼんと取り残されたこの自然のオアシスの、いつ消えてしまいかかわらない危うさ、はかなさを物語っているように思えるのだった。

僕のように様々な音を録音して歩いていると、自然と耳が研ぎ澄まされてくるに違いない、と思われるかもしれない。しかし実際は逆で、いずれにしてもテープ・レコーダーが自分の代わりに音を聞いていてくれるのだから、自分の耳は働かせなくてもいい、という怠惰な誘惑にかられるのが常である。もちろん、テープ・レコーダーはもの考えるたり、特定の音に注意を集中したりすることは出来ない。しかし、僕たちはふだんの生活の中で、いかに本当の音を聞いていないことか、それを教えてくれるのが、テープ・レコーダーという機械である。

(東 和志 思)

忘れていた音が甦る瞬間

ジム・メツナー—文
JIM METZNER